

筑紫（九州）の萬葉集と風景画シリーズ（第四十一回）

ゆふまやま

「木綿間山」

〈むなかつたよつつかれんざん ゆかわやま〉
宗像四塚連山「湯川山」〈

よしえやし 恋ひじとすれど

ゆふまやま

木綿間山 越えにし 君が思ほ

ゆらくに

卷十二—3191 作者…未詳

（解説）もうあきらめて、慕うまいとするけれど、木綿間山を越えていったわが君が思いだされてなりません。

・「よしえやし」は思い切る決意をあらわす意である。

この歌は「別れを悲しぶる歌」の一首である。

・この歌に詠われている「木綿間山」についてはいろいろな説があるようであるが、その一つとして九州には次の説がある。

・江戸時代前期の福岡藩の儒学者だった貝原益軒が元禄十六（1703）年に著した「筑前国続風土記」には次のように記述している。

おんがぐんおかがぎらよう

・「初ノ浦（今の福岡県遠賀郡岡垣町大字波津Ⅱ湯川初浦）の西の高き山を【湯川山】と云。宗像郡鐘崎（現・福岡県宗像市鐘崎）との境也。此山の谷にむかし温泉有。

此山を【ゆわう丸山とも云。】是「木綿間山」をよこなまりて云か。木綿間山は万葉の歌によみたる名所也。【湯川山】は遠賀郡に属せり・・・」と記される。

・「湯川山」は福岡市と北九州市のほぼ中央に位置し玄界灘と響灘に面し西に「福岡県宗像市」東に「福岡県遠賀郡岡垣町」との境界を作る南北に連なる山の一つである。

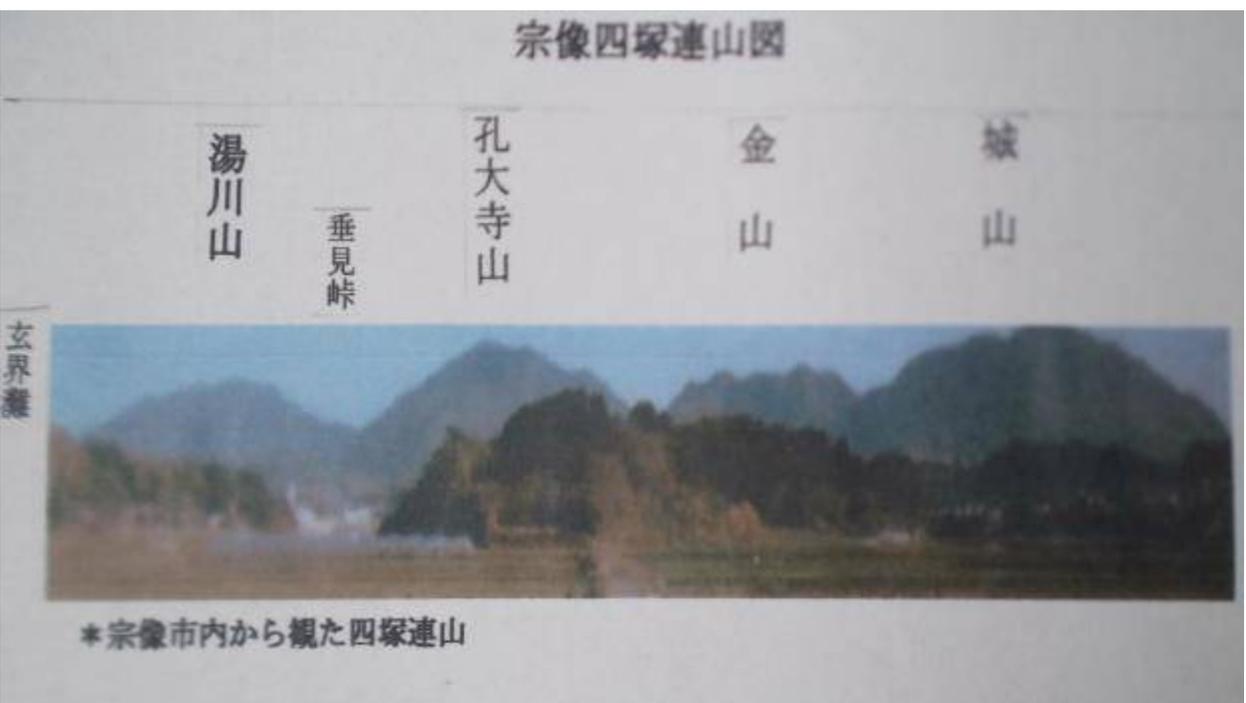
・最も南城の城山（標高369m）から金山（317m）・孔大寺山（499m）・

湯川山（471m）と連なる四つの山が「宗像四塚連山」や「岡垣四つ山」と古くか

ら呼び親しまれている。湯川山はその連山の一番北端に位置し唯一、海に面している

山である。北面は玄界灘に面し、その斜面には古代の朝鮮式山城跡や牧場跡、水門跡

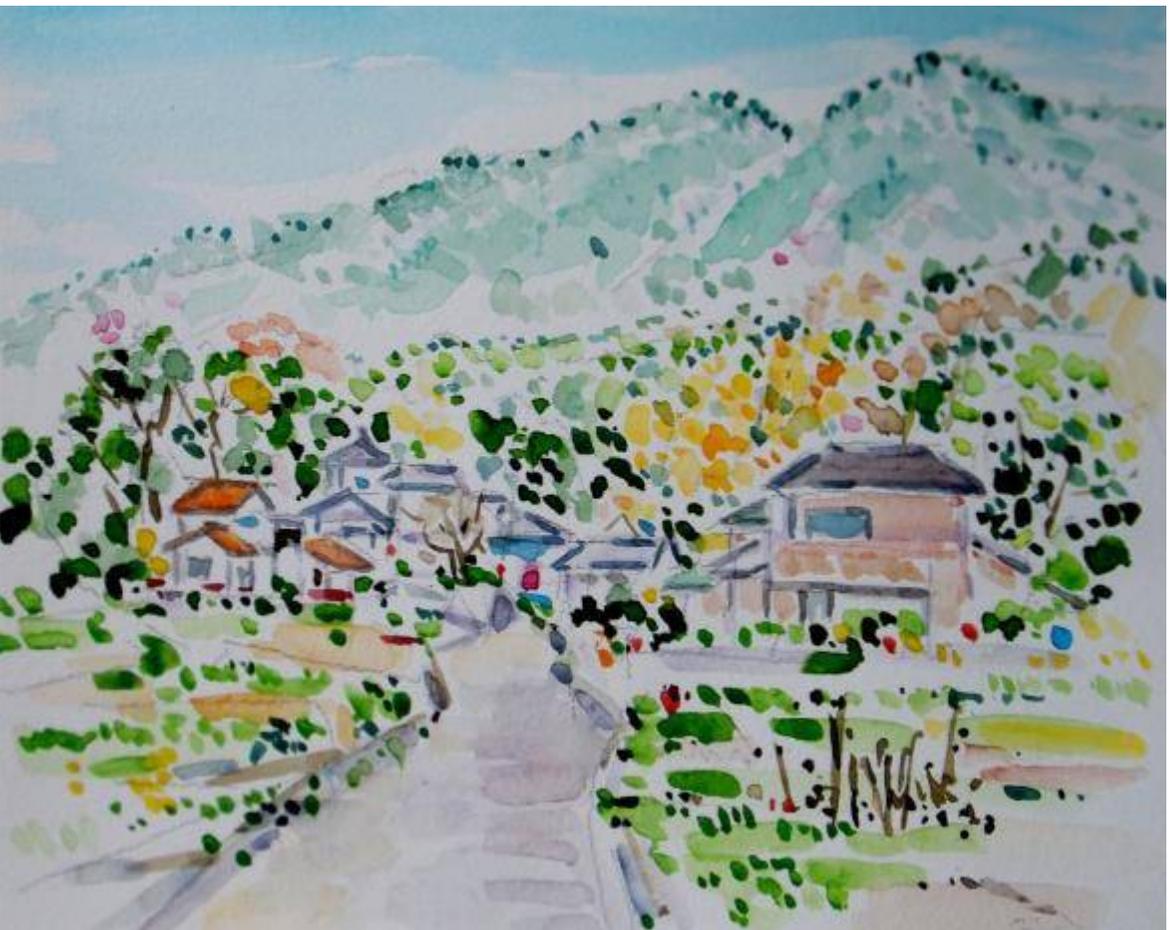
などが見られ多くの伝説やロマン豊かな山である。



・宗像四塚連山の北の端にある「湯川山」と南隣につながる「孔大寺山」の間にある

垂見峠は筑前続風土記には「宗像郡（現・宗像市）より遠賀郡内浦（現・遠賀郡岡垣・内浦）に出る嶺なり。いにしへ都へ往還の道なりしと云。」とあり、古代に大宰府と奈良の京を結ぶ官道【西海道大宰府路】は宗像郡から、この峠を越えて遠賀郡岡垣に至ったと道と推定される。大宰府の官人たちなどの旅人も都へ往還などする際にはこの垂見峠を越えたものと考えられ、この万葉歌もこの辺りで別れた恋人などを思いだし詠われた歌ではないかとも思われる。

・垂見峠には、現在、福岡市（東区）から北九州市（若松区）に至る国道495号線が東西に走っている。



（写生地）湯川山の西麓には、古代、中央政府と地方の連絡路として作られた官道「西

海道大宰府路」を官使の公用で往来するに当って、宿泊や給食を提供する場所である「うまや 駅家・津日駅」があったとの説がある。この駅家跡と推定される湯川山・西麓にある宗像郡上八村（現・宗像市上八の一带）（かたじけなくむらび） 集落と背景に遠くにそびえる「湯川山（木綿間山とも呼ぶ）」を描く。（杏花）

（位置図）



（交通機関）西鉄バスでJR鹿児島本線「東郷駅前」又は「赤間駅前」↓「元末で下車すぐ。」

（参考文献） 貝原益軒著「筑前国統風土記」。「新岡垣風土記」 木下良著「日本古代の道と駅など」